

「神の恵みの福音」と「御国の福音」

【聖書箇所】使徒の働き 20 章 17～27 節

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 20 章 17～27 節

- 17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。
- 18 彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。「皆さんは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。
- 19 私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。
- 20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、
- 21 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。
- 22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。
- 23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみ私を待っていると言われることです。
- 24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。
- 25 皆さん、御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま私は知っています。
- 26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。
- 27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

ベレーシート

●上記の使徒の働き 20 章 17～27 節は、使徒パウロが 3 年間手塩にかけて建て上げてきたエペソの教会の長老たちを呼び集めて語った訣別説教の一部です。その訣別説教の性格の特徴は最も大切だと思われることだけを言い伝えて(言い残して)おくことです。その訣別説教の中に、新約聖書でそこにしか使われていない言葉があります。それは「神の恵みの福音」という言葉です。それと連動して「御国の福音」があります。原文では「御国」という言葉しかありませんが、泉田昭師は「御国の福音」と訳しています。つまり「御国」と「御国の福音」は同義なのだということです。いずれにしても「福音」は「良きおとずれ、良い知らせ、グッド・ニュース」を意味します。ギリシア語は「ユー・アγγελイオン」(εὐαγγέλιον)、ヘブル語は「ベソラー」(הַבְּשׂוּרָה)で、動詞「パーサル」(בָּשַׂר)に由来します。しかしパウロは、「神の恵みの福音」と「御国の福音」を微妙に使い分けているように思います。今回はその微妙な違いをできるだけ正しく理解したいと思います。それらはいずれも驚くべき内容をもったニュースなのです。

セッション 1

●「**神の恵みの福音**」は、イエシュアの十字架の死と復活によってもたらされた福音です。それは私たちが神に立ち返って、それを信じるだけで、自分のものとすることができます。一方の「**御国の福音**」は、「神の恵みの福音」という神のお膳立てに基づきながら、天と地の基の置かれる前から、あらかじめ定められていた神のご計画とみこころ、御旨と目的が、イエシュアの再臨によってこの地上に実現される良き知らせなのです。「御国」という言葉をマタイの福音書では「天の御国」(「マルフォート・シャーマイム」מְלִכּוּת שָׁמַיִם)と呼び、マルコの福音書とルカの福音書では「神の国」(「マルフォート・ハーエローヒーム」מְלִכּוּת הָאֱלֹהִים)と呼びます。いずれも「マルフォート」という語彙が使われていますが、「マルフォート」は「王国」を意味します。つまり、神の御子イエシュアが再臨される時に、この地上においてご自身の王国(千年王国)を打ち建てられることを意味しますが、これが旧約の多くの預言者たちが預言してきた「御国の福音」なのです。

●イエシュアがこの世に来られた時(初臨)に語られた教えやなされた奇蹟は、この「御国」のデモンストレーションでした。公生涯の終わりに「神の恵みの福音」も語られましたが、多くの弟子たちはそれを全く理解することができませんでした。この「神の恵みの福音」を私たちに明確に教えることのできた人が使徒パウロです。彼の手紙にはこの「神の恵みの福音」の真髄が明かされているのですが、この福音を正しく理解するためには、「御国の福音」の知識が不可欠だということ突き付けられるのです。

1. 驚くほど贅沢な「神の恵みの福音」

●イエシュアの十字架の死と復活に基づく「神の恵みの福音」の驚くべき内容を、だれよりも明確に言及したのは使徒パウロです。彼はキリストに出会ってからの生涯のすべてを人々にあかしし続けました。ここで「あかしする」と訳されたギリシア語は「ディアマルトウロマイ」(διαμαρτύρομαι)で、「力を込めて、厳かに言明(断言)する」ことを意味しますが、ここではより自ら進んでというニュアンス(アオリスト・中態)です。自分の身に起こった日々の個人的な経験を人々の前であかしするというレベルとは異なります。神が私たちのために、御子イエシュアの十字架の死と復活の出来事によってなされたことの恵みの内実です。パウロはこの神の恵みの福音を人々に伝える務めを、自分の使命として主から受け取りました。その彼が「その任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と語っています。

●神の恵みは「罪の赦し」だけでなく、「新しい身分(立場)」(キリストにあるアイデンティティ)を与えます。この恵みは神からの賜物(プレゼント)です。私たちの責任は、無償で与えられる神の恵みを無駄にしないことです。使徒パウロは「神の恵みによって、私は今の私になりました。」と述べています。神の恵みはパウロに対して、新しいアイデンティティを与えました。パウロはキリストに出会う前の自分のことを、次のように述べています。

【新改訳改訂第3版】ピリピ人への手紙 3章 5~6節

5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、

6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

セッション 1

●彼は、キリストに出会うまでは自分を誇っていたのです。それは、「きつすいの」「熱心」「非難されるところのない者」といった表現に見られます。事実、彼は当時、エルサレムにおいて最も有名であったラビ(=先生)のもとで学びの訓練を受け、同世代の誰よりも熱心であったことを誇っていました。「教会を迫害する」という恐ろしい罪を犯しましたが、そのことさえも正しいことだと信じていたのです。ところがそんなパウロが、キリストに出会ってからの自分を次のように告白しています。

7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損(=ちりあくた、ふん土)と思うようになりました。

●使徒パウロのお気に入りのことばは何でしょうか。「**主にあって**」とか、「**キリストにあって**」ということばです。これは何を意味するかといえば、キリストに出会うまでの自分はアダムに属していたが、キリストに出会いキリストを信じることで、キリスト(第二のアダム)に属する者となったということの意味をしています。アダムに属している限り、決して罪とその結果である罪責感と死から逃れることはできません。どんな良い事をしたとしても罪の中に置き去りにされたままです。ところが、キリストを信じる者は、神の御前に、完全に罪なき者として(「義とされて」)受け入れられ、たとえ罪を犯し失敗したとしても、キリストから引き離されることは決してなく、キリストのおかげで、ありのままに神の完全な愛の中に受け入れられているという・・・これが神の恵みの福音と言われるものなのです。まさに、「おかげさま」なのです。

(1) 神の恵みによって今の私がある

●使徒パウロはコリント人への手紙で次のように述べています。

【新改訳改訂第3版】I コリント書 15章 9～10節

9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。

10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。

●10節には、「神の恵み」という語彙が3回も使われています。「恵み」はギリシア語の「カリス」(χάρις)ですが、その意味するところは、「あり得ないプレゼント」が与えられること。「トンデモナイ立場」に置かれることなのです。この「恵み」がパウロの生涯を全く新しいものにしましたのです。パウロの自分に対する自己評価、人生の目的も刷新され、彼の心の中にあるすべての罪責感や劣等感といったマイナスの思いからも解放されただけでなく、ほかのすべての使徒たちよりも多く働く原動力となったのです。「罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれる」(ローマ 5:20)という現実、その神の恵みの現実がパウロを新しい人に造り変えたのです。そんな変化をパウロにもたらした神の恵みについて、私たちはもっと深く探してみたいと思います。

セッション 1

●神の恵みの福音は、以下のように、ヘブル特有の修辞法であるパラリズムで表されています。

- ①義認—〔法廷用語〕・・・キリストの血によって**義**とされた(罪のない者とみなされるという)恵み。
- ②和解—〔友好用語〕・・・神と敵対関係にあった者が神と**和解**させられるという恵み。
- ③贖い—〔奴隷用語〕・・・代価が支払われることで奴隷の身分から**解放**されるという恵み。
- ④養子—〔家族用語〕・・・神の**子どもとされる特権**が与えられるという恵み。
- ⑤宥め—〔祭儀用語〕・・・罪に対する神の怒りをなだめることのできる**赦し**の恵み。
- ⑥免除—〔簿記用語〕・・・決して払うことのできない膨大な負債が**免除**されるという恵み。
- ⑦いのち〔霊的用語〕・・・死から解放されて、賜物としての**永遠のいのち**が与えられるという恵み。

(2) 「ヒュベル」(ὕπερ)の恵み

●「神の恵みの福音」を特徴づけているのは、第一に、ギリシア語の「ヒュベル」(ὕπερ)という前置詞です。その基本的意味は、「〇〇〇のために」です。この〇〇〇の中に、私やあなたの名前を入れてください。イエシュアは、〇〇〇のために十字架の上で死なれ、そして、〇〇〇のためによみがえられたのです。したがって、神の恵みの福音は、「**ヒュベルの福音**」ということができます。つまり、「私のため」「あなたのため」の福音なのです。そのことを示している聖書のことばをいくつか引用してみましょう。

●主語はすべて「キリスト」です。

①「〇〇〇の罪のために」

【新改訳改訂第3版】Iコリント15章3節

私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、

②「〇〇〇が義と認められるために」

【新改訳改訂第3版】ローマ書4章25節

主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

③「不敬虔な〇〇〇のために」

【新改訳改訂第3版】ローマ書5章6節

私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。

④「罪人であった〇〇〇のために」

【新改訳改訂第3版】ローマ書5章8節

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

⑤「〇〇〇のために」

【新改訳改訂第3版】エペソ書5章2節

また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

セッション 1

⑥ 「律法によってのろわれた〇〇〇のために」

【新改訳改訂第3版】ガラテヤ書 3章 13節

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれたものである」と書いてあるからです。

● 「神の恵みの福音」とは、徹頭徹尾、すべてにおいて、完全に、〇〇〇のためになされた神の出来事(事実)に基づくもので、「身代わりの十字架の恵み」とも言われます。ですから私たちはそれを賜物として信じて受け取れば良いのです。そこには何の条件もありません。無条件です。キリストの十字架の死は、〇〇〇のために、キリストが自ら罪のいけにえとなって、のろわれ死んでくださったという良い知らせです。また、キリストの復活は、〇〇〇が神の前に罪を赦されて義と認められるためなのです。そのように、キリストの十字架の死と復活の出来事は、すべて〇〇〇のためであったことを知ってほしいのです。

(2) 「スン」(συν)の恵み

● 「神の恵みの福音」を特徴づけている第二のギリシア語は、「ともに」を意味する「スン」(συν)という接頭辞です。「神の恵みの福音」は「ヒュベル(〜のための)の福音」だけでなく、この「**スン(キリストとともに)の福音**」によって特徴づけられます。しかしながら、この「スンの福音」は、「ヒュベルの福音」よりもなかなか理解しがたいものがあります。この「スンの福音」こそ、「聖化の恵み」と言われているものなので、「磔殺の十字架の恵み」とも言われます。パウロは「スンの福音」を以下のことばで言い表しています。

【新改訳改訂第3版】ガラテヤ書 2章 20節

私はキリストとともに十字架につけられました(完了形・受動態)。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです(現在形)。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

● このみことばが言おうとしていることはどういうことでしょうか。それは、キリストとともに私は十字架につけられたという事実であり、それゆえ私はすでにキリストとともに死んでしまっているということです。しかしキリストが死からよみがえられたことによって、私もキリストとともによみがえっているという事実がすでに神においてなされており、それが今の私だとパウロは言っているのです。それゆえ「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」と言えるのです。換言するならば、「いま私が肉にあって生きているのは(=目に見える私の現在の姿は)、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっている(=御子を信じる信仰によって存在している)のです」とも言えるのです。

● このことをパウロは次のように表現しています。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 6章 4~9、11節

4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにおいて新しい歩みをするためです。

セッション 1

5 もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。

8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。

9 キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。

.....

11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。

●おそらく、このことがなかなか理解しにくいと思うのですが、ここに記されていることは、キリストが再び来られる時(携挙による再臨であっても、地上再臨であっても)、キリストを信じている者たちはみな、新しい栄光の朽ちないからだに変えられて、上記のことが実現されるということです。それは目に見える形で現わされますが、今は目に見えないだけです。目に見えなくても、すでに神の側ではキリストを信じる者たちがそうなるようにしてくださっているのです。たとえば、(順不同)

①もはや死ぬことはないこと

②いのちにおいて新しい歩みをする事

③罪のからだが減びたことにより、私たちがもはや罪の奴隷ではなく、自由人とされていること

●これらのことがすでに、キリストの十字架の死と復活によって可能となったのですから、そのことを信じて、それにふさわしく、今を生きなさいというのが、「**スンの恵み**」です。

●「**ヒュペルの恵み**」は、どこまでも私のための恵みであり、無償で与えられる恵みです。もし罪を犯したとしても、「ヒュペルの恵み」はより一層その力を発揮するのです。罪に対する自覚が深まれば深まるほど、この「ヒュペルの恵み」のすごさを実感できるのです。それは、「恵みが増し加えられるために、罪の中にとどまるべきでは」と誤解されてしまうほどの恵みの福音なのです。そしてもう一つの「**スンの恵み**」は、キリストとともに死んだ者はすでに罪からも、また死からも解放されているという御国の完成の先取りを恵みとして、信仰をもって生きることなのです。この信仰は終末論的パラダイムに基づく信仰です。ヘブル修辭法の「**預言的完了形**」(将来に起こる出来事が確実に起こることを表わすために完了形で表される語法)と酷似しています。

●御国の福音を宣べ伝えることは、キリストの十字架の恵みの福音を終末論的パラダイムに基づく信仰によって、神の永遠のご計画とみこころ、御旨と目的の視点から「余すところなく」論証することで、揺るぎない御国へのあこがれを抱かせ、その希望によって今を生きる力を得させるのです。そのためには聖書を絶えず学び続ける必要があります。パウロは絶えず、「神の恵みの福音」に言及しつつ、同時に、「御国の福音」

セッション 1

を余すところなく教えたとするならば、この二つは教会を建て上げていく上でなくてはならない不可欠な大黒柱だと言えるのです。

2. ゆるぎない希望を与える「御国の福音」

●今日、道を歩く人の少ない田舎でも、病院へ行くと「なぜこんなに人がいるんだ!!」と驚かされます。多くの人が病気で苦しんでいることが分かります。未曾有の超高齢化社会を迎えている日本では、ますますこうした光景を見ることになるはずで。なぜ人は病気になるのか。それは私たちが罪人であるからにほかなりません。エデンの園に病気はありませんでした。しかし将来、イエシュアが王としてこの地に打ち建てられる御国(千年王国)では、人はすでに朽ちることのない栄光のからだに変えられているために病気はありません。「そこ(シオン)に住む者は、だれも「私は病気だ」とは言わず、そこに住む民の罪は赦される。」(イザヤ 33:24)とあるからです。

●ヘブライズム(ヘブル的思惟)においては、「からだ」は神のご計画においてきわめて重要なキーワードです。これを表わすヘブル語は「バーサール」(בֶּשָׂר)ですが、ギリシア語の場合、「からだ」を「ソーマ」(σωμα)と「サルクス」(σάρξ)の二つの語彙で表します。ギリシア的思惟では、目に見えない「たましい」が重要であり、それが「からだ」という枠の中に閉じ込められているものと考えます。ですから、その「からだ」から自由の身となることが救いだと考えます。つまりギリシア的思惟(ヘレニズム)では、「からだ」は背負わされている厄介物という捉え方しかありません。しかしヘブル語の場合、「バーサール」(בֶּשָׂר)という一語で表わしているという点が重要です。この語彙が聖書で初めて登場するのは創世記 2 章 21~24 節です。そこには以下のように「バーサール」が 4 回使われています。

【新改訳改訂第 3 版】 2 章 21~24 節

21 神である【主】は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、
そのところの肉をふさがれた。

22 神である【主】は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

23 人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られた
のだから。」

24 それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

●21 節、23 節にある「肉」は物質的な「からだ」としての「肉」ですが、24 節の「一体」と訳された「バーサール・エハーッド」(בֶּשָׂר אֶחָד)にある「体」は、有機的、親密なかかわりを表わす概念です。この「バーサール」(בֶּשָׂר)こそ、神と人、夫と妻、かしらとからだ、花婿(キリスト)と花嫁(教会)という結婚の一体性の概念を啓示するものです。からだの存在なしに夫婦の愛が成立しないように、からだの存在なくして神と人とが共に住むという御国を完成させることはできないのです。また、かしらなるキリストはからだなる教会の存在なしに何もすることができないのです。このように、「からだ」は永遠の愛のかかわりを実現さ

セッション 1

せるためになくてはならないものなのです。それゆえ、イエシュアが死からよみがえり、信じる者に朽ちることのない栄光のからだを約束しておられることは、究極的な福音となるのです。

●イエシュアが受肉されたその秘義は、そのからだから流れ出る血潮によって「バーサール」(רִבְּרָא)が贖われるだけでなく、復活(よみがえり)のいのちによって新しくされた「バーサール」(栄光のからだ)によって、永遠に神と人とが共に住むことが実現するということです。これこそ、神が天地創造をなされる前にあらかじめもっておられたご計画であり、エデンの園の回復と言えるのです。その意味において、「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。」(ヘブル 10:5)というメシア預言は、御国を実現する上において理にかなったことであったのです。

●イエシュアが「御国の福音」を宣べ伝えた時に、多くの病める者たちが癒されました。また死んだ者(イエシュアはこれを「眠っている」と表現します)を生き返らせる奇蹟をなさいました。これは決して人々の注目を集めるための一時的な手段ではなく、むしろ、永遠の御国がどこかを指し示すデモンストレーションでした。それゆえ、ヘブル語の「からだ」を意味する名詞「バーサール」(רִבְּרָא)の動詞「バーサール」(רִבְּרָא)のピエル態(強意形)が「良い知らせを告げ知らせる」という意味を持っていることは、特筆すべきことなのです。ちなみに、御国がこの地に実現される時にはどんな病も一瞬にして(たちどころに、すぐに、たちまち、ただちに)いやされるでしょう。それはイエシュアがなさったいやしの記事を見るならば、一目瞭然です。また「眠った者」(実際に死んだ者)も一瞬にして生き返ります。この希望を持って主を待ち望む者にとっては、「良い知らせ」とは「からだに関すること」なのです。使徒パウロは将来に啓示される栄光について次のように述べています。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 8章 18~25節

18 今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。

20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。

21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。

22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

23 そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしてくださいこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

24 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。

25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

●「御国の福音」のすばらしさについては、もっともっと聖書全体から学ぶ必要があります。それは「主の祈り」の中にある「御国が来ますように」という祈りを、私たちがより切実な思いをもって祈るためです。そのためには、神のご計画を知るための知恵と啓示の御霊が豊かに与えられるように祈らなければなりません。

セッション 1

ん。なぜなら、御霊の助けによって、私たちの心の目がさらにはっきりと見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神を信じる私たちに働く力がどのように偉大なものであるかを、私たち自身が知るためなのです。

付 記

イエシュアの「御国のデモンストレーション」における

「パラクレーマ」(παραχρημα)

●ギリシア語の「パラクレーマ」(παραχρημα)は、ルカの特愛用語です。新約では 18 回使用されていますが、マタイの福音書 21 章 19 節と 20 節の 2 回を除けば、すべてルカ文書(ルカの福音書と使徒の働き)の中で使われている語彙(副詞)です。この語彙は、目に見える出来事や状況の急激な変化 (様変わり)を表わす時に用いられているようです。その変化の領域は、いやしとさばきにおいてです。訳語としては、「たちどころに」「すぐに」「ただちに」「たちまち」「とたんに」。英語訳では、immediately, at once, instantly, just, so quickly などが用いられています。

●ちなみに、「速さ」を表わすギリシア語に「タクス」(ταχύς)があります。新約全体で 18 回使われていますが、これは「すぐに、速やかに、早急に、・・・する」という形で使われます。つまり、「タクス」は行動を促す際にその行動の速やかさを表わすのに用いられるようです。たとえば、「早く仲良くなる」(マタイ 5:25)、「急いで・・・を知らせる」(マタイ 28:7)、「急いで着物を持ってくる」(ルカ 15:22)、「あなた(イスカリオテのユダ)がしようとしていることを、今すぐしなさい」(ヨハネ 13:27)、「聞くには早く」(ヤコブ 1:19)、「見よ。わたしはすぐに来る」(黙示録 22:7,12,20)・・・などです。他にも、「すぐに」と訳される「エウス」(εὐθύς)があります。マルコの福音書の特愛用語ですが、「パラクレーマ」(παραχρημα)と「タクス」(ταχύς)の両方の意味を合わせ持っています。

1. 目に見える急激な変化の現われを示す「パラクレーマ」(παραχρημα)

●「パラクレーマ」(παραχρημα)を分析してみると、以下に見るように「救い」(=いやし)と「さばき」(=死)の場面において、急激な状況や状態の変化を表わす時に用いられていることが分かります。

(1) いやしの場面

①ルカ 1 章 64 節 (閉ざされたザカリヤの口と舌)

セッション 1

すると、**たちどころに**、彼の口が開け、舌は解け、ものが言えるようになって神をほめたたえた。

②ルカ 4 章 39 節 (熱で苦しんでいたシモンのしゅうとめ)

イエスがその枕もとに来て、熱をしっかりとつけられると、熱がひき、彼女は**すぐに**立ち上がって彼らをもてなし始めた。

③ルカ 5 章 25 節 (中風の人)

すると彼は、**たちどころに**人々の前で立ち上がり、寝ていた床をたたんで、神をあがめながら自分の家に帰った。

④ルカ 8 章 44 節 (12 年間苦しんだ長血の女)

イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、**たちどころに**出血が止まった。

⑤ルカ 8 章 47 節 (長血の女)

女は、隠しきれないと知って、震えながら進み出て、御前にひれ伏し、すべての民の前で、イエスにさわったわけと、**たちどころに**いやされた次第とを話した。

⑥ルカ 8 章 55 節 (12 歳になるヤイロの娘)

すると、娘の霊が戻って、娘は**ただちに**起き上がった。それでイエスは、娘に食事をさせるように言いつけられた。

⑦ルカ 13 章 13 節 (18 年間も病の霊につかれ、腰の曲がった女)

手を置かれると、女は**たちどころに**腰が伸びて、神をあがめた。

⑧ルカ 18 章 43 節 (盲人)

彼は**たちどころに**目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て民はみな神を賛美した。

⑨使徒 3 章 7 節 (40 年間、足なえだった男)

彼の右手を取って立たせた。すると**たちまち**、彼の足とくるぶしが強くなり、(立ち、歩きだした)

⑩使徒 16 章 26 節 (パウロとシラスが入れられたピリピの牢獄)

ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、**たちまち**とびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。

⑪使徒 16 章 33 節 (看守とその家族の回心と救い)

看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとで**すぐ**、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。

(2) さばきの場面

①マタイ 21 章 19 節 (実のないいちじく)

道ばたにいちじくの木が見えたので、近づいて行かれたが、葉のほかは何もないのに気づかれた。それで、イエスはその木に「おまえの実は、もういつまでも、ならないように」と言われた。すると、**たちまち**いちじくの木は枯れた。

②マタイ 21 章 20 節 (実のないいちじく)

弟子たちは、これを見て、驚いて言った。「どうして、こう**すぐに**いちじくの木が枯れたのでしょうか。」

③ルカ 22 章 60 節 (ペテロの裏切り)

しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません」と言った。それとっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、(ここに新共同訳は「突然」・口語訳は「**たちまち**」を入れている)鶏が鳴いた。

④使徒 5 章 10 節 (アナニヤの妻サツピラの欺き)

すると彼女は、**たちまち**ペテロの足もとに倒れ、息が絶えた。入って来た青年たちは、彼女が死んだのを見て、運び出し、夫のそばに葬った。

⑤使徒 12 章 23 節 (ヘロデの高慢)

すると**たちまち**、主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫にかまれて息が

セッション 1

絶えた。

⑥使徒 13 章 11 節 (総督の信仰を妨げようとした魔術師に対するパウロの言葉)

見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる」と言った。すると**たちまち**、かすみとやみが彼をおおったので、彼は手を引いてくれる人を捜し回った。

(3) その他

ルカ 19 章 11 節 ・ ・ 時間的な速さ(ギリシア語の「タクス」(ταχύς)に近い意味)

人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国が**すく**にでも現れるように思っていたからである。

●以上の分析によって、ギリシア語の「**パラクレーマ**」(παράκλημα)は、目に見える急激な変化の現われを示す場面で使われています。イエシュアが来臨されて、神のあらかじめ計画しておられた「御国」が近づいたことが示され、そしてその「御国」が到来したときにどうなるかというデモンストレーションが、教えと奇蹟によってなされたと考えるならば、福音書に記されている多くのいやしは、一瞬にして肉体(「パーサー」**רִשְׁרִשׁ**)がいやされ、**朽ちない栄光のからだに変えられる**というデモンストレーションであったと考えられるのです。なぜなら、御国の福音は「からだ」に関する事柄であり、主を信じる者が一瞬にして新しいからだ(=朽ちることのない栄光のからだ)に変えられることによって、神との交わりが可能となるという「良き知らせ」だからです。

●ちなみに、ヘブル語の「パーサー」(**רִשְׁרִשׁ**)の動詞「パーサル」(**רִשְׁרַשׁ**)には、「**良き知らせを伝える**」という意味があることもそのことを裏付けています。聖書において「からだ」は重要な概念です。イエシュアご自身が復活によって「新しいからだ」「栄光のからだ」に変えられたことと、私たちがやがてキリストの再臨(空中携挙)によって「朽ちることのない栄光のからだ」に変えられることがなければ、神の国(天の御国)を相続することができないからです(I コリント 15:50)。このことは聖書独自の概念であり、奥義なのです。

2. 「第一の復活」(栄光のからだ)に与る者たち



黄色の線は、「第一の復活」(朽ちることのない栄光のからだ)に与ってメシア王国(御国)に入る者たちです。

セッション 1

- 「第一の復活」とは、キリストと同様の「朽ちることのない栄光のからだ」が与えられることを意味します。「第一の復活」に与るグループは三つあります。一つ目のグループは旧約時代に神を信じていた人々、二つ目のグループはイエシュアをメシアと信じるユダヤ人と異邦人、つまり、「キリストの花嫁」(キリストのからだなる教会)です。そして三つ目のグループは患難時代(七年間)に神を信じた人々(殉教者も含めて)です。
- 「第一の復活」に与る時期は二つあります。それは「キリストの空中再臨の時」と「キリストの地上再臨の前」です。「キリストの空中再臨の時」に第一の復活に与るのは、イエシュアをメシアと信じるユダヤ人と異邦人、すなわち教会(キリストの花嫁、キリストのからだ)のメンバーです。つまり、すでに死んでキリストのもとにいる信者と地上で生きている信者です。「キリストの地上再臨の前」に第一の復活に与るのは、旧約時代の聖徒たちと、七年間の患難時代において悔い改め、信仰を持って殉教した聖徒たちです。
- メシア王国には、第一の復活を与えられた「旧約の聖徒たち」と「携挙された教会の人々」と、および、「患難時代に殉教した人々」、さらに第一の復活に与っていない「患難時代に信仰をもって死なずにいた人々」が合流することになります。